3・11 後を生きる

洗う

木塚康成

ランドセルに
名前を書き込んでも
背負う子供はもういません
泥の中からやっと見つけ出した
野球帽は
誇らしげに破れていました
針も糸もなくて　おかあさんは
「ごめんね」とつぶやきながら
冷たい川の水で
手を真っ赤にして帽子を洗いました

泥の中には
果たされなかったたくさんの約束が埋もれています
あの日食卓に並ぶはずだった食器
期限が残された定期券
まっさらの学生服
未完のものはまだ他にもあります
知らない家族のアルバムです
最後にそれを閉じた人たちは
どこかで無事に寄り添っていると思うのです
そして
もっともっと温かい家族写真を
ここにもう一枚加えてほしい
泥まみれの写真は
知らない人たちに洗われて輝きだすのです

あの日　海は見たことがないほど凶暴でした
樹のなくなった褐色の大地に
悲しみの足跡は増え続け
放たれて群れをなした犬たちの咆哮（ほうこう）が
日ごとに大きくなってゆきます
今　雨交じりの風が穏やかな海から
やさしく吹いています
ぼくたちの泥で汚れた額を洗い
流すかのように
そう　水は何も悪いことをしていません
黒い水が膨らむのを止めないのは
ぼくたちのせいです
雨脚は激しくなるばかりです

（「脱原発・自然エネルギー218人詩集」より）

きづか・やすなり
1954年、広島県生まれ。同県呉市在住。3・11当日、かつての被災地神戸で東日本大震災発生を知る。

大津波によってたくさんの家族写真が瓦礫（がれき）や泥のなかに埋もれてしまいました。それらを探し出し、洗い、修復して、持ち主に返す―。ボランティアたちの心温まる支援活動のことを知り、私は3・11以降書けなかった詩を書き上げました。六十七年前世界で最初の爆心地となった広島では「黒い雨」が降り、そして第三の爆心地となった福島では「黒い水」が膨張し続けました。広島に暮らす私は水へのレクイエムを書かずにはいられませんでした。

アシタノコトバ